

兵庫県における旧石器時代研究の課題

久保弘幸

1. 兵庫県下の研究略史

兵庫県下での後期旧石器時代研究史は、板井・寺ヶ谷遺跡および七日市遺跡の調査を基点として考えることができる。両遺跡の調査は、兵庫県のみならず日本列島の後期旧石器時代遺跡研究史の中でも、特筆される調査であったが、以後すでに35年が経過し、周辺地域での資料の蓄積も進んだ現在、県下の旧石器研究は新たな地平を切り開く時期に至ったと言えるだろう。小論では兵庫県下における研究史を踏まえつつ、解決すべき課題を抽出し、今後の調査・研究の方向性を示すことを主題とする。

(1) 七日市遺跡 板井・寺ヶ谷遺跡以前

西日本で旧石器時代研究の扉を開いたのは、鎌木義昌である。鎌木は、近畿～備讃瀬戸地域での発掘調査を踏まえて編年の枠組みを示したが（鎌木義昌・高橋護 1965）、その中で、後期旧石器時代末に位置付けられたのが、家島群島太島遺跡であった（家島群島総合学術調査団 1962）。しかし鎌木が編年に用いた遺跡には、石器包含層に堆積学上の問題が存在することが指摘され（柳田俊雄 1977）、安定した堆積物中から後期旧石器時代の遺跡を見出すことがその後の調査研究の課題となった。

この時期、兵庫県下では地域の研究者によって丹念な表面採集調査がおこなわれ、旧石器資料が蓄積された。松藤和人、佐藤良二、上月昭信らは、播磨地域における既存資料を集成し、この地域の後期旧石器について包括的な評価をおこなった（松藤 1980 佐藤 1980a・1980b 上月 1980）。

一方、大阪府、奈良県では、この時期すでに注目すべき調査研究成果が蓄積されつつあった。同志社大学旧石器文化談話会による二上山麓の踏査によって、初めてサヌカイト原産地遺跡の実体が示され、鎌木が提唱した瀬戸内技法の工程が大きく修正された（松藤和人 1974）。さらに奈良県立橿原考古学研究所により、二上山麓で桜ヶ丘第Ⅰ地点遺跡の発掘調査が実施された（松藤和人編 1985）。サヌカイトの原産地遺跡における初めて発掘調査を率いたのは松藤和人であったが、その松藤が調査実施のために交渉した相手が、当時橿原考古学研究所に所属していた石野博信であったという。他にも、大阪府郡家今城遺跡、津之江南遺跡などが次々と調査され、その成果が報告された。

(2) 七日市遺跡 板井・寺ヶ谷遺跡以降

1984年～85年は、兵庫県下の旧石器時代研究史に特筆すべき年である。舞鶴自動車の建設に伴う発掘調査によって、丹波市七日市遺跡、篠山市板井・寺ヶ谷遺跡で、広域火山灰層を挟む地層中から、複数の文化層をもつ後期旧石器時代の大規模な遺跡が見いだされたのである。両遺跡では始良Tn火山灰（AT）が厚く堆積しており、板井寺ヶ谷遺跡では、ATに後続する大山系火山灰の安定した堆積も認められた。七日市遺跡ではAT下位に3枚の文化層が、板井・寺ヶ谷遺跡ではAT下位およびATと大山系火山灰に挟まれた上位に各1枚の文化層が検出されたが、これらは近畿地方で後期旧石器時代の石器群が、明確な鍵層を伴って層位的に出土した初の事例となった。

加えて両遺跡では年代測定のみならず、さまざまな古環境学・古地磁気学、火山灰など多方面の自然科学者との協同調査が実施されたことも高く評価できよう。また板井・寺ヶ谷遺跡においては、山口卓也により遺跡構造と石材の関係が詳細に分析され、石材獲得と石器製作工程、遺跡形成と集団などの問

題について大きな成果を挙げたことも特筆しておきたい。

その後1990年代にかけて、七日市遺跡ではさらに2度にわたって旧石器時代遺跡の調査がおこなわれ、AT直下に4番目の文化層の存在が提唱されたほか、三田市溝口遺跡、丹波市梶原遺跡、小野市勝手野遺跡、淡路市まるやま遺跡、新温泉町畑ヶ平遺跡、明石市西脇遺跡、たつの市碓岩・南山遺跡などの調査がおこなわれ、良好な資料の蓄積が進んだ。

2. 既往研究からみた課題

(1) 後期旧石器時代

(a) 編年に関する問題

筆者は兵庫県下および他地域での成果も踏まえて、近畿・瀬戸内地域での後期旧石器時代石器群の編年案を示してきた(久保 2014ほか)。表1に筆者の編年案と、県下の後期旧石器時代遺跡の位置づけを示す。各段階を区分する基本的な考え方は表中に示したとおりであり、現段階で基本的な編年の枠組みについて大きな改訂を必要とするとは考えていないが、なお解決すべき問題点は存在している。

①瀬戸内技法・国府石器群の成立と終焉

近畿・瀬戸内沿岸地域の後期旧石器文化を特徴づける最大の要素は、瀬戸内技法と国府石器群である。定型的な横長剥片剥離技術を基盤としたナイフ形石器の一群は、あまりに特徴的であるが故に、本地域では常に瀬戸内技法・国府石器群の成立と消滅が、編年の核として語られることが多かった。そのような考察は「瀬戸内技法の盛衰史観」として批判されもしたが、資料の蓄積が進んだ現在もなお、瀬戸内技法の成立・消滅の時期やその過程には不明の点が多い。ただし今後の編年研究で取り扱うべきは、瀬戸内技法の存否、国府石器群の成立や消滅といった単純化された問題ではない。

瀬戸内技法・国府石器群とは、近畿・瀬戸内地域で成立した横長剥片剥離技術を基盤とする石器群構造の、ひとつの典型化した布置だと筆者は考えている。今後課題とすべきは、この地域における横長剥片剥離技術を基盤とする石器群の技術構造、遺跡・遺構の構造、石材獲得や原産地利用の形態といった多様な側面から分析であり、そこから後期旧石器時代社会の変化をどのように理解するかという総合的な研究である。そのためには精緻な調査と、多方面からの自然科学的アプローチが必須である。

②角錐状石器を主体とする石器群

角錐状石器を主体とする石器群は、日本列島では、AT降灰後第Ⅱ段階の初頭に突如出現するように見える。県下では板井・寺ヶ谷遺跡上位文化層で、本器種を主体とする石器群が検出されているが、ナイフ形石器を含まず、石器群の組成はナイフ形石器を主体とした他の遺跡とは大きな隔りがある。

近畿地方での状況を見ると、郡家川西遺跡で板井・寺ヶ谷遺跡と類同の石器群が検出されている一方、郡家今城遺跡C地点、楠葉東遺跡等では、瀬戸内技法を基盤とする石器群中に、ごく少数の角錐状石器が組成されるという姿を見せている。ナイフ形石器という器種が第Ⅰ段階から継続する器種であることを考えると、角錐状石器を主体とした石器群は、あたかも別の集団が外部から嵌入したように見える。

近畿地方において、角錐状石器を主体とする石器群自体がどのように変遷するのか、またナイフ形石器を主体とする石器群との間に、石材利用や石器製作技術体系にどのような構造的共通性と差異性があるのかについて、遺物のみならず遺跡構造も含めた検討が必要と考えられる。

③ナイフ形石器の終焉と細石刃文化

兵庫県下で第Ⅴ段階(細石刃文化期)に属する遺跡は甚だ少ない。これは近畿地方全般にも共通する

表 1 兵庫県下と周辺地域の後期旧石器文化の編年 (*¹⁴C年代はすべてAMSによる未校正年代)

段階	石器群の特徴	主要な石器	広域火山灰	主要な遺跡	
				兵庫県	近隣地域
V	細石刃石器群	細石刃		まるやま (假田地点)	恩原M文化層
IV	横長剥片剥離技術 を基盤とした石器 群の消滅	多様な形態の小型ナイフ形石器	Suk16740±150		原田3~4層
III b	横長剥片剥離技術 を主体とした石器 群	国府型ナイフ形石器・多様な 横剥ナイフ形石器・角錐状石 器・周縁加工尖頭器 (?)		西脇	馬見二ノ谷・藤坂宮山・ 八尾南第6地点
III a				碓岩南山	原田5層・津之江南
II b	瀬戸内技法を主体 とする石器群	国府型ナイフ形石器・角錐状 石器			恩原S文化層・翠鳥園 上層・八尾南第3地点
II a			MsP24000±150 Uh Od	板井寺ヶ谷上位文化 層・上山?・杉ヶ沢?	郡家今城C地点・翠鳥 園下層・国府第3地点
I b	瀬戸内技法・石刃 技法の出現	国府型ナイフ形石器	Sh24320±150 AT24830±100	七日市Ⅲ・Ⅳ文化層 板井寺ヶ谷下位文化 層・畑ヶ平?	恩原R文化層・原田7 層上部・法華寺南 瓜破北
I a	汎列島の共通性を 持つ石器群	台形石器・ナイフ形石器・刃 部磨製石斧		七日市第Ⅱ文化層 溝口 勝手野・畑ヶ平	原田7層下部・冠D地 点V層・小林河原X層・ 長原14層

問題で、散発的に細石刃石核、あるいは細石刃石核を作成するためのスポールなどが出土してはいるものの、これほど調査が進展した現在においてさえ、細石刃を主体とした石器群が安定した状況で検出された事例を見ない。近隣地域での調査状況と比較すると、備讃瀬戸や中国山地帯での調査によって、細石刃文化期の資料が得られている岡山県とは対照的である。このような状況の中で注目されるのは、淡路市まるやま遺跡で縄文時代の遺物と混在する形で出土したものではあるが、細石刃核、細石刃のある程度まとまった資料である(山本誠編 2002)。細石刃核には素材となった礫表皮を残した多面体状のものと、剥片素材の扁平なものがあるが、後者においては板状を呈する素材の側面に狭い剥離作業面を設けるといふ、備讃瀬戸地域の細石刃と通底する技術的特徴が看取される。

近畿地方で、細石刃石器群が先行するナイフ形石器を主体とする石器群とどのように関連し、また縄文時代草創期の石器群がどのように展開したかを明らかにするためには、今後、地域の研究者による踏査資料中に当該時期の資料を求める等、広い視野に立つ資料の探索が必要であろう。

④広域火山灰と石器群

これまでの調査によって、ATと文化層との関係はかなり明らかにされてきたが、AT以外の広域火山灰層、特に大山系火山灰と石器群との関係性については、板井・寺ヶ谷遺跡上位文化層を除けば、依然として解決されていない点が多い。板井・寺ヶ谷遺跡以外では、唯一、碓岩・南山遺跡で三瓶浮布降下軽石(Suk)との層位的関係が示唆された例があるに過ぎない。

近年中国地方では上下のホーキ火山灰、弥山パミス、三瓶・浮布軽石等と文化層の関係が明らかにされつつあり、広域編年の確立に大きく寄与している。これらの降灰があったと推測される県北部の遺跡において、精緻な試料採取手法の採用と分析・同定がおこなわれ、広域火山灰のみならず風化帯・暗色帯なども含めた広域的層序が、水系単位、段丘面単位で確立されることが強く期待される。

(b) 石材の獲得と集団

兵庫県下での後期旧石器時代遺跡での石材使用状況をみると、地域ごとに特徴的な状況が看取される。

播磨、摂津、淡路の瀬戸内海に面した地域ではサヌカイトが優占し、これにチャートが伴う。また摂津の三田盆地に所在する溝口遺跡は現在の海岸線から25kmほど内陸にあたるが、鉄石英を主体とする石器群が検出されている。加古川中流域の勝手野遺跡では、チャートを主体に少数のサヌカイトを含む。

丹波地域の石器群は、豊富な在地石材であるチャートを主とし、これに少数のサヌカイトが付随する七日市遺跡第Ⅱ・第Ⅲ文化層、相対的にチャートが多いものの、石器組成がチャートとサヌカイトでは拮抗する板井・寺ヶ谷遺跡下位文化層、七日市遺跡第Ⅳ文化層、サヌカイトが主体となる板井・寺ヶ谷遺跡上位文化層などが認められる。

但馬地域で最もまとまった資料が得られた畑ヶ平遺跡では、表面採集資中に黒曜石製台形石器が複数含まれるほか、流紋岩、安山岩、碧玉などの石材が認められる。発掘調査で出土した35点の資料では、流紋岩が70%以上を占め、他に石英、安山岩、黒曜石が組成される。別宮家野遺跡ではチャート・サヌカイト・泥岩・泥板岩が用いられており、上山遺跡、杉ヶ沢遺跡採集のナイフ形石器は、前者がサヌカイト、後者が流紋岩(?)とされている。黒曜石を除けばいずれも但馬地域で獲得可能な石材である。

【サヌカイト】

兵庫県下、特に播磨・淡路地域で多用されるサヌカイトの主要な原産地は、奈良－大阪県境の二上山、淡路島北端の岩屋、香川県の五色台周辺である。現在の瀬戸内海沿岸部の遺跡から見れば、これらの原産地は「遠隔地」とは言い難く、例えば明石市西脇遺跡から岩屋までの直線距離は13kmに過ぎない。後期旧石器時代には瀬戸内海が広い低地であったことを考慮すると、瀬戸内低地中央部でサヌカイト礫が獲得できた可能性もあり、その場合は石材獲得のために必要な移動距離は、さらに小さくなるだろう。

しかしながら県下の旧石器時代遺跡から見ると、サヌカイトは多くの場合遠隔地石材である。表2に、まとまった石器群が出土した主要な遺跡から、原産地までの直線距離、およびサヌカイトの原産地分析の結果を示した。この表から見れば、明石海峡から至近の位置にある遺跡を除けば、県下の遺跡からサヌカイト原産地までは、20～100kmの距離があることが理解される。にもかかわらず、多くの遺跡において石器製作を行いうるだけの石材が持ち込まれている点は注目すべきであろう。

【チャートその他：いわゆる在地石材】

県下で最も多く利用された在地石材はチャートであろう。チャートは丹波山地帯に分布し、露頭面およびそこから流下する河川で採集可能な石材である。七日市遺跡での事例を見ると、水磨された河川礫から、角礫に近いものまでさまざまな礫を利用しており、露頭近辺から河川敷に至る多様な場で石材が獲得されていたと考えられる。ただしチャートは、礫の内部に縦横に脈が入り、また、風化帯を含む細

表2 県下主要遺跡から石材原産地までの距離と出土石材分析結果（各報告書より）

遺 跡 名	原産地までの直線距離（地理院地図で計測:km）				サヌカイト原産地分析結果（％）			黒曜石原産地分析結果（％）	
	二上山	五色台	岩屋	隠岐	二上山	岩屋	不明	隠岐(久見)	高岡二上山
勝手野遺跡	75	103	25	218	17	83	－	－	－
碓岩・南山遺跡	107	73	47	－	－	－	－	－	－
西脇遺跡	70	100	13	－	－	－	－	－	－
板井・寺ヶ谷遺跡(下位文化層)	77	138	57	214	77	15	8	－	－
七日市遺跡（第Ⅱ文化層）	85	140	64	205	56	24	20	100*	－
七日市遺跡（第Ⅳ文化層）					60	40	0	80	20
溝口遺跡	62	130	41	－	－	－	－	－	－
畑ヶ平遺跡	148	129	105	139	－	－	－	－	－

かな亀裂が入り込んでいることがある。このため「割ってみて初めて良質か否かがわかる」傾向がある。七日市遺跡第Ⅲ文化層の接合資料のうち、ほとんど原礫近くまで接合されたものを見ると、周辺に豊産する石材を次々に割って、良質な部分を選択したものと推測される。

鉄石英¹と呼称される石材は、筆者の知る範囲では、武庫川中流域の三田市などで段丘礫層に包含されるが、礫の供給源については明確ではない。段丘礫層に包含されるこの種の礫は、拳大から直径20cm超まであり、石器石材として十分な大きさのものを確保することができる。三田市溝口遺跡ではこの石材が主体となっているが、これらは近隣の段丘礫層ないしは河川敷で採取されたものであろう。溝口遺跡以外で、鉄石英を主体として使用している石器群はこれまでのところ知られていない。

但馬地域で多用される流紋岩、安山岩（サヌカイト以外）、石英等の石材は、いずれも但馬地域の岩脈、水系で得られるものであろう。しかしここで留意しなければならないのは、岩石の同定の困難さである。白石純がおこなった蛍光X線解析と顕微鏡観察による分析では、神鍋遺跡群の縄文時代石器石材のうち、それまで肉眼観察により安山岩としていた石材の約半数が頁岩、残る半数が主に金山産のサヌカイト、流紋岩とされていた石材のすべてがチャートであった。白石の分析結果は、多様な石材を使用する地域で経験的な肉眼判定に頼りすぎることの危険性を示している。（白石純 2003）

【黒曜石】

県下での黒曜石出土量はわずかである。その中で原産地分析が行われた資料を見るならば、1例を除き、いずれも隠岐（久見）産黒曜石と判定されている。隠岐に最も近い畑ヶ平遺跡からでも直線で140km近く、七日市遺跡からは200km超の距離である。また七日市遺跡第Ⅱ文化層で、唯一高岡二上山（富山県）産黒曜石と判定された資料があるが、この原産地との直線距離は250kmに達する。

【石材の獲得と集団の遊動】

数十kmから100kmを超える遠隔地石材の獲得は、関東地方で長野県産黒曜石が多く利用されているように、後期旧石器時代では特殊な事例とは言えない。こうした遠距離の石材獲得についてはいくつかの方法が想定されている。

第1は、生活の単位となる集団全体が、原産地まで移動して石材獲得をする場合である。一定領域を遊動する生活環の中に石材の消費量と採取量が企画化され、集団全体が石材原産地に回帰する方法である。原産地では、次の回帰までの期間を前提にした石器の生産、原石の獲得がおこなわれ、原石、石核素材から製品までの様々な段階の石材が持ち出される²。

第2は、石材獲得のために少集団を分派する方式である。石材原産地が母集団の遊動領域から大きく離れている場合には、集団全体が石材獲得のために移動するよりも必要なエネルギーは小さくなる。しかし小集団の分派では、獲得できる原石の量が限られるという不利が発生し、また遠距離であればあるほど、石材確保に不確定な要素が増加することは容易に推測される。関東地方に持ち込まれている長野県産黒曜石についてはこの方式を推定する見解がある。

第3は、良質な石材が交換材として集団間で授受される場合である。ただし遊動生活の中で、集団間の接触がどの程度おこなわれたかについては、今のところ判断する根拠がない。

県下各遺跡において、在地石材・遠隔地石材の獲得のために、集団がどのような戦略を有し、それが後期旧石器時代を通じてどのように変化したかを明らかにすることは、後期旧石器時代社会を復元する上で最重要の課題の一つである。そのために今後必須となるのは、やはり石器群を構成する全石材種の包括的な同定と原産地分析である。石材の獲得がどのように行われていたかを検証するためには、石材

の同定とともに、各石材の量比、製作工程ごとの石材組成・原産地組成を数値として示すべきである。これは同時に、そうした分析を可能にする調査・整理手法の採用が必須であることを含意している。

加えてこれまで在地系とされている石材については、それを取得できる露頭、河床などの探索が、県域を越えて必要である。石材獲得可能な領域が、面的なものか線状のものか、あるいは点に過ぎないのかは、集団の遊動領域の問題とも重なる重要な課題である。

(c) 遺跡の立地と古環境

但馬地域では、標高600m～1,000mの高原地帯で後期旧石器時代の遺跡が見いだされている。最も高標高地にあるのは畑ヶ平遺跡で、石器出土地点は980～1,020m付近に分布している。また上山遺跡は標高約900m、別宮家野遺跡は693m、杉ヶ沢第13地点は760mを測る。これらの高原遺跡のうち、最も古く位置付けられるのは文化層がAT下位に位置する畑ヶ平遺跡で、MISステージ3に、上山高原遺跡、杉ヶ沢遺跡は、ステージ2の最寒冷期に相当するだろう。

杉ヶ沢遺跡、板井・寺ヶ谷遺跡では、花粉、植物遺体の分析によってステージ3～2の気候変化が明らかにされている。杉ヶ沢遺跡第13地点では、AT下位ではツガ属、モミ属、トウヒ属等を主にした冷温帯落葉広葉樹林～亜寒帯針葉樹林への移行的な森林相、上位ではモミ属とマツ属（五葉松型）の急増とスギ、コウヤマキの急減・消滅から、亜寒帯針葉樹林への変化が推定されている（前田保夫 1991）。

板井・寺ヶ谷遺跡でも、落葉広葉樹+マツ科単維管束亜属というAT下位の森林相から、降灰後はモミ属、トウヒ属等の針葉樹が優占することなどから、寒冷・乾燥化があったと判断されている（大井・南木・能代 1991）。こうした寒冷気候の下で、高原遺跡が設営された理由については、不明な点が多い。

稲田孝司は、中国山地帯の高原に分布する後期旧石器時代遺跡について、石材獲得と交通路の確保という可能性を指摘している（稲田孝司 1990）。稲田は中国山地の尾根と高原を結ぶネットワーク状の交通路としての遺跡立地を推測し、その目的として①石材の獲得、②大型動物群の移動と狩猟との関係などを挙げている。これは後期旧石器時代の高原遺跡を考える上で考慮すべき仮説である。

上記①は、精緻な石材の同定を多数実施することで検証できる可能性がある。②については、実際の化石骨で検証することは今後も困難であろう。ただしMISステージ3の段階ではナウマンゾウなどの大型動物群は健在であり、それらの狩猟が行われていた可能性はあるが、AT降灰後、ステージ2の初頭にはすでにナウマンゾウは激減していたであろう（高橋啓一 2013）ことは考慮しなければならない。

古環境の変遷などを考慮すると、後期旧石器時代を通じて高原遺跡の機能が等価であったとは断定できないと筆者は考えている。今後の調査では、①高原遺跡と平地遺跡における石器組成、遺跡構造などの検証、②遺構単位の、よりミクロな視点に基づく古環境学的な分析などが必要であり、これに対応した発掘調査の技術的向上が強く期待される。

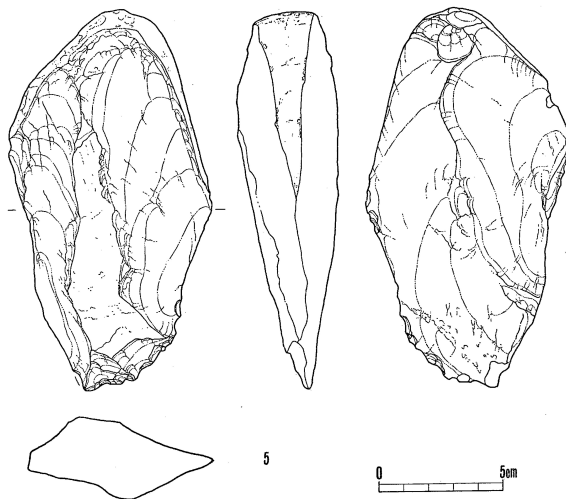
(2) 前期旧石器時代

前期旧石器時代遺跡捏造事件が露見したことで、東北地方を中心とした列島の前期旧石器調査研究は瓦解したが、松藤和人を中心とした研究者のグループによる緻密な調査によって、島根県砂原遺跡、長野県木崎小丸山遺跡など、複数の遺跡で、12万年～8万年前の遺跡が存在することが改めて確認された（砂原遺跡学術発掘調査団編 2013・木崎小丸山遺跡学術発掘調査団編 2017）。その背景には発掘調査における記録手法の大幅な刷新、さらには石材の性質、風化の進行などで観察が困難な石器における観察技術の革新などがなされた³。

残念ながら兵庫県では、確実な前期旧石器時代遺跡は知られていない⁴。しかし筆者は、高松龍暉・

山口卓也によって発表された、養父市クサリ山遺跡出土の石器に注目している(第1図:高松・山口 1985)。

本資料は開墾をしていた個人が掘り出した資料であるが、大型の礫を分割するようにして得た剥片の一端に、わずかな二次加工を施したもので、後期旧石器時代の石器とは一線を画する古拙な印象を受ける⁵。出土の際の記憶では、「表土下1m、ローム状を呈する黄褐色土層中から出土した」という。この「黄褐色土層」がどのような地層であったか定かではないが、但馬地域にこのような資料が存在し、それがローム状の地山から出土したということには、十分に留意しておかねばならない。



第1図 養父市クサリ山遺跡出土の石器
(高松・山口 1985より)

かつて筆者が、同じ養父市の万久里で観察した高さ数mに及ぶ断面では、火山灰層を挟んで、硬化した黄褐色～赤褐色のシルト層(段丘面形成以前と思われる)が複数認められた。今後このような露頭面で、地形および段丘の区分、火山灰の同定などが行われれば、但馬地域における前期旧石器探索への大きな足掛かりとなるだろう。同じく筆者が調査した小野市勝手野遺跡では、AT下の後期旧石器包含層よりも下位に麓屑面の角礫層があり、さらにその下位に、無遺物ではあったが土壌化した黄褐色シルト層が見られた。麓屑面の堆積物に被覆されることで、古い地層が浸食を免れる可能性も考慮しておくべきだろう。安易に「古い石器」のみを追いかけるのではなく、考古学、自然科学の多方面から、着実に成果の蓄積がおこなわれることを強く望みたい。積極的な探索がなければ扉は開かれないのである。

3. 結語

兵庫県下における旧石器時代研究の現状と、取り組むべき課題について記述した。紙数の都合上、問題点のすべてについて触れることはできなかったが、今後求められる方向性については示せたであろう。ここに列挙した課題は、新たな遺跡の発見と調査によって、はじめて進展するものであるが、そのためには、常に研究者が問題意識を持ちつつ調査に取り組むことが必要である。そして広い県域と多様な地形環境を有する兵庫県は、西日本の旧石器時代研究を牽引するステージとして、十分な場であることは言うまでもない。今後の調査が新たな階梯に上ることを期待したい。

謝辞

石野博信先生は、兵庫県立考古博物館に館長として着任されて以降、あらゆる場を使って考古学の面白さをわかりやすい語り口で語ってこられた。常に現場に足を運ばれ、我々調査担当者にさまざまな質問を投げかけられ、また、遺跡を理解するためのヒントを語られた。私自身、先生の広範で深い知識から繰り出される言葉の一つ一つに、幾度も驚き、また深い感動を覚えた記憶がある。米寿を迎えられてなお、考古学に対する情熱を燃やされる姿を拝見するにつけ、ぜひ自分も肖りたいものと思う。これからますますお元気で、我々を叱咤していただきたいと心から願いつつ拙文の筆を置くことにする。

注

1. 本石材は今後、正しく同定した岩石学的名称で記載する必要があるが、小論中では旧来の呼称を用いる。
2. 山口卓也は、二上山麓におけるサヌカイトの獲得と、瀬戸内技法の製作工程、集団の遊動を総合して「工程別異所展開」という石器・石材獲得戦略を示している（山口卓也 1994）。
3. 遺物出土状況を、さまざまな地質学的現象の痕跡まで含めて、3次元的に精緻に記録する手法が採用されている。また風化が著しい石器では、剥離面の斑晶を観察する手法が上峯篤史によって提唱された（上峯 2014）。
4. 春成秀爾による西八木海岸の調査で出土した木製品、およびかつてその周辺で採集された資料は生活面に伴うものではないが留意すべき資料である（春成 1987）。また1997年に明石市藤江川添遺跡で出土し、ハンドアックスかとされたためのう製石器（稲原昭嘉 1998）も出土層準が砂礫層中であり生活面に伴うものではない。
5. 残念ながら筆者は実見していない。高松氏の逝去後、本資料は養父市に帰属したようだが、現在その所在を確かめることができないようである。

引用・参考文献 紙数の都合により各遺跡の発掘調査報告書については省略した

家島群島総合学術調査団 1962『家島群島』

稲田孝司 1990「日本海南西沿岸地域の旧石器文化」『第四紀研究』第29巻第3号 日本第四紀学会 pp. 248-253

稲原昭嘉 1998「明石市藤江川添遺跡出土の旧石器」『旧石器考古学』56 旧石器文化談話会 pp. 82-84

上峯篤史 2014「斑晶観察法による「前期旧石器」の再検討－島根県出雲市砂原遺跡における事例研究－」『旧石器考古学』79 旧石器文化談話会 pp. 1-16

大井信夫・南木睦彦・能代修一 1991「兵庫県板井寺ヶ谷遺跡の植物化石と周辺の古植生」『板井寺ヶ谷遺跡』兵庫県文化財調査報告第96-1冊 兵庫県教育委員会 pp. 17-84

鎌木義昌・高橋護 1965「瀬戸内地方の先土器時代」『日本の考古学Ⅰ 先土器時代』河出書房新社

木崎小丸山遺跡学術発掘調査団編 2017「長野県木崎小丸山旧石器遺跡の研究」『旧石器考古学』旧石器文化談話会 pp. 1-26

久保弘幸 2014「西日本後期旧石器文化の編年と瀬戸内技法」『旧石器考古学』79 旧石器文化談話会 pp. 17-30

上月昭信 1980「志方町およびその周辺と加西市における遺跡の立地と遺物散布状況」『旧石器考古学』21 旧石器文化談話会 pp. 111-123

佐藤良二 1980a「志方町・加西市および周辺の旧石器」『旧石器考古学』21 旧石器文化談話会 pp. 93-126

1980b「播磨中部丘陵周辺の旧石器」『旧石器考古学』21 旧石器文化談話会 pp. 59-72

砂原遺跡学術発掘調査団編 2013『砂原旧石器遺跡の研究 島根県出雲市多伎町砂原所在砂原遺跡発掘調査報告書』

高橋啓一 2013「日本のゾウ化石、その起源と移り変わり」『豊橋市自然史博物館研報』No.23 pp. 65-73

高松龍暉・山口卓也 1985「但馬地方における旧石器について（2）」『兵庫考古』第21号兵庫考古研究会 pp. 1-7

春成秀爾 1987「4 西八木層出土の人工遺物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第13集 pp. 55-82

前田保夫 1991「杉ヶ沢遺跡の花粉分析」『杉ヶ沢遺跡』兵庫県文化財調査報告第95冊兵庫県教育委員会 pp. 97-103

松藤和人 1974「瀬戸内技法の再検討」『ふたがみ』学生社 pp. 138-163

松藤和人 1980「近畿西部・瀬戸内地方におけるナイフ形石器文化の諸様相」『旧石器考古学』21 旧石器文化談話会 pp. 213-259

柳田俊雄 1977「瀬戸内東部および近畿地方における旧石器時代研究の現状と問題点」『プレリユード』20 同志社大学 旧石器文化談話会 pp. 1-13

山口卓也 1994「二上山を中心とした石材の獲得」『瀬戸内技法とその時代』中・四国旧石器文化談話会 pp. 185-198